

研究ノート

近代化日本—欧米との関わりでみる日本の近代化— (6)

— 世界史的視点から —

松原正道*

はじめに

前稿では、「桶狭間の戦い」の前哨戦とも言える「村木砦の戦い」について触れた。松平家の内紛に乘じ三河へ進出する事で、駿河、遠江の三国を支配するようになった今川家と新興の弾正忠織田家とは境を接する事となり、両家の間に軍事行動が度々起こるのだった。

I. 桶狭間の戦いと織田信長の天下人への歩み

父弾正忠家織田信秀（永正7〈1510〉-天文20〈51〉）が拠る、那古野（名古屋）等諸説ある信長の出生地として有力視されている勝幡^{しよばた}は、津島、清州と、中世、鎌倉街道の宿駅で鎌倉幕府の将軍の上下向の際の宿泊地として栄えた海東郡の萱津^{かやづ}とを結ぶ交通の要衝だった。

清州の西にあり牛頭天王を祀り、今日でも「水上の祇園祭り」とも言われ豪華な「天王祭」が行われる津島神社（牛頭天王社）の門前町の津島は、「津島衆」と言われる豊かな商人による天王川から伊勢湾、更には、東海沿岸から関東、紀伊半島、瀬戸内海、四国へと繋がる水上交通で栄えていたのである。



写真1 勝幡城址



写真2 津島神社

*淑徳大学名誉教授

商業活動で得られる経済力(富)を持つ津島に食指を動かした信長の祖父信貞(生没年不詳)に対し、「津島衆」は数度にわたり抵抗を試みるが、大永4(1525)年、織田勢の焼き討ちに遭い、有力者大橋重長と信長の姉とも言われている織田家の娘が婚姻を結ぶ事で和睦するのだが、以後、津島は織田家の影響を受け、織田家の経済力の支えとなるのである。

この時の織田勢について、

強硬策は後の信長のやり方を髣髴させる。

池上裕子『織田信長』吉川弘文館 2016 9頁

と言われるように血筋と言うのか、祖父の「戦さ」を学んだと言うのか、信長には「徹底」と言う言葉を感じさせられる。

「姉川の戦い」に見られる将軍足利義昭と通じた朝倉・浅井との対決の際、中立を要請したにも関わらず比叡山延暦寺が両軍に加担した事に対し、



写真3 延暦寺根本中堂

九月十二日、比叡山を攻撃し、根本中堂・日吉大社をはじめ仏堂・神社、僧坊・経蔵、一棟も残さず、一挙に焼き払った。煙は雲霞の湧き上がるごとく、無残にも一山ことごとく灰燼の地と化した。(中略)皆はだしのままで八王寺山へ逃げ上り、日吉大社の奥宮に逃げ込んだ。諸隊の兵は、四方から鬨の声をあげて攻め上がった。僧・俗・児童・学僧・上人、すべての首を切り、信長の検分に供して、これは叡山を代表するほどの高僧であるとか、貴僧である、学識高い僧であるなどと言上した。そのほか美女・小童、数も知れぬほど捕らえ、信長の前に引き出した。悪僧は言うまでもなく、「私どもはお助けください」と口々に哀願する者たちも決して宥さず、一人残らず首を打ち落した。哀れにも数千の死体のごろごろとこころがり、目も当てられぬ有

様だった。

太田牛一著・中川太古訳『信長公記』新人物文庫 2014 173-4頁
と言われ、後付けの感はあるが、

「職業の機能分化」を重視する信長にすれば、宗教の本文を放棄し、世俗権力と結びついていた延暦寺の行為は「僧尼のなすべからざるごと」であり、到底許すことは出来なかった。

童門冬二『新約 信長の言葉』KADOKAWA 2014 27頁
とも言われる様に、そこには、「徹底」と言う言葉を思い浮かべさせられるのである。

尤も、この「焼き討ち」について、これにより同寺は、以後、政治に振り回される事なく、本来の宗教活動に専念出来るようになった。と、今日、関係者は言うのである。

こうした信長については、

信長に味方せず敵方を利して、信長を窮地に陥れたから、敵を徹底的に破碎する信長流の報復戦をしたのである。もちろん、そこには計算があった。天皇・都の鎮護を担って公武の手厚い保護を受け、信仰の対象でもある比叡山でさえ容赦なく攻め滅ぼすというメッセージである。わが身と家の存続をひたすら願う天皇・公家らは信長の機嫌をそこねないようにつとめるしかなかった。だから、信長が本当に将軍になりたいと願ったなら、天皇側がそれを拒否する事はとても考えられない。

池上 同上書 81頁

との指摘の如く、対抗する者には容赦せず断固たる姿勢を示すのであるが、これによって、その後の無駄な争いを抑止すると言う意図をも感じさせられるのだが、これを「合理」と取る事が出来るだろう。

この「徹底」した姿勢を示すための裏付けとして「武(力)」があり、それを以て天下を統一すると言う「天下布武」をその旗印として掲げ、そのために臨機応変に戦える仕組みを持つ「戦さ集団」のために、「兵農分離」が「理」に適っていたのである。

これ迄の「戦さ」は、これに携わる侍達が土地と結びついた半農・半武士と言う形だったため、作付け・収穫と言った農業にとっての重要時期に「戦さ」が左右されるのだった。

そこで、信長は、家業を継げない者達を集め、「戦さ」に備えて訓練をさせた専門の「戦さ集団」を作り出すのである。この「戦さ集団」は土地に縛られないため機動性を発揮し、常に「戦さ」に備える事が出来る事になる。「常備軍」の誕生と言える。

信長自身、勝幡に生まれ、那古野、清州、小牧、岐阜、そして、安土へと拠点を度々移しており、武士の真情としての「一所懸命」と言う考えが、彼にはどこ迄あったのだろう。「一所懸命」に関わっているのは、機動性を伴う臨機応変に行動する事は難しい。

そして、「一所懸命」に繋がる、土地を戦功のあった者に与える一方、自らも行ない奨励し盛んにした「茶の湯」。茶道具に付加価値を付けそれを恩賞として与えたと言われている。

これについては、「物(茶道具)」の価値をどう判断するかである。その物の機能及び原材料の多寡で以て判断出来る物は簡単だが、芸術的付加価値を判断する事は難しい。所有者自身が値をつける事が出来る物は、需要と供給で以てその「値い」が決まる。

「茶の湯」が盛んになれば道具の値段も上がり、それを土地と匹敵するものとして家臣に与えたところなど、「利」を求める商才に長けた「商人」に通ずものを感じさせられる。

祖父が津島の「経済力(富)」に眼を着けた如く、信長にもその認識があったと言える。

政治において、「財政」、「経済」、有態に言うなら「金」の裏付けは絶対で、政治に携わる者、古今東西を通じこれのために知恵を絞るのである。そのために、重税を課す者、景気を高揚させ金回りを良くし、自らにもそれが回ってくる仕組みを作った者等々。

そして、何事においても、「情報」が重要であり、これについても、各地を旅する商人、また、「御師」等の果たす役割は大きい。そのため、信長は、「祭り」を盛大に行うというような仕掛けを作りながら、商人等を活用。それが、津島であり熱田で、やがては、堺等畿内にも及ぶのである。

「武将」信長は、「武」と共に「財」の重要さを認識。そのため商業を重視し、それは、安土城下に設けた「楽市・楽座」を奨励した事を以て顕著に見る事が出来るのである。武将にとって「武」と共に「利」を考える事は必須で、それは、何人にも言える事でもある。

度重なる拠点の移動、「常備軍」としての「戦さ集団」の養成。それに伴う近代城郭の始まりと言われる小牧山城の築城。そして、自らを「神」の如くに見せるための壮大な天守を



写真4 小牧山城



写真5 小牧山城から望む濃尾平野

誇り、街造りもそれに相応しいものだったとされる安土城を建設。

「見せる」を意識したと思わせる城造り。それは、これを以て自らの「武（力）」を絶対のものであると人々に知らしめ、徒な争いを避ける効果を狙ったのではないかとも考えさせられるのである。そして、小牧山城からは濃尾平野が一望出来、その先には京都があり、安土城からは琵琶湖を越えれば京都と言う如く、歴史上特別の意味を持つ京の都が身近に感じられる地政学上の立場にあった事が、信長を天下人としての「思い」を持たせたとも言える。



写真6 安土城



写真7 安土城天守閣模型

事を成す者にとって、「天の利」、「時の利」、「人の利」と共に、「地の利」の持つ意味は大きい。前三者の「利」は事を成す者の力量に左右される側面があるが、「地の利」は物理的なものとして、絶対的側面を有していると言える。

尤も、そうした事も、事を成す者の「力量（徳）」Virtuを以て克服する事が肝要だとマキアヴェリ Niccolo Machiavelli (1469-1527) は「君主論」*Il Principe*で言っているのである。

西欧において、「近代化」の要件としての「人間主義」Humanism、「合理主義」Rationalismが言われ、「因習」を嫌い「自由」な発想に基づく「考え」に従い、人間味に溢れたとする「古代」を見直そうとした「ルネサンス」。カトリックの在り方を批判した「宗教改革」。ザビエルに日本渡航を促した航海術の発展による「大航海時代」。政治面では、「国民国家」の形成とそれに伴う「官僚制」、「常備軍」の確立が言われる。そして、コロンブス等の冒険家、フィレンツェのメディチ家の様な商人達が、西欧に富をもたらすのである。

ザビエルに見るイエズス会の海外布教はポルトガルの海外進出策と不可分で、カトリックを至上とし、これを多くの人々に伝え、「幸せ」を分かち与える事こそ使命だとするのだが、そのため植民地獲得の「先兵」となるのだった。これは西欧人が「発見」した地域の人々に「不幸」をもたらすのだが、根づくのである。

時恰も、日本の戦国時代と時を同じくしていた。

西欧の「近代化」と信長にみられる「合理」とが時を同じくして見られた事をどう考える

か。「歴史」の「妙」なのか。信長の「合理」と西欧のそれとがどう関わるのだろうか。

「徹底」した態度、それは、彼の政治を象徴する「天下布武」を生み、「家柄」とか、「権威」ではなく、「武（力）」を以て天下を治めると言う「下剋上」を現出するのである。将軍には手をつけたが、「最高の『権威』である天皇」には関わりを持つ事なく彼は逝った。

天文15（1546）年以來続いているとされる織田家と今川家との争いを、「桶狭間の戦い」で決着をつけた事で、信長に天下人への道を歩ませるのだった。

今川義元は駿河・遠江国の統治を嫡子氏真に譲り、自らは三河国の領国化を達成して、次の目標である尾張国への軍事行動に着手するのである。義元は、永禄3年（1560）5月、二万五〇〇〇人（『北条5代記』）とも四万五〇〇〇人（『信長公記』）ともいわれる軍勢を催して駿府を発し、遠江・三河を通して尾張国桶狭間に陣をしき、さらなる前進を企図した。

有光友学『今川義元』吉川弘文館 2008 276頁

そして、

義元は、永禄元～二年ころ家督を嫡子氏真に譲り、永禄二年三月には七ヶ条の軍法を定め、八月には朝比奈泰能に大高城（名古屋市）在城を命じ、十月には軍勢と兵糧を補給した。出陣の準備を着々と進め、ついに永禄三年五月、大軍を率いて駿府を発ち、十八日には国境を越えて尾張の沓掛城に入った。

池上裕子『織田信長』吉川弘文館 2016 15頁

等と言われる様に、その軍勢については『信長公記』に基づくものが多く、諸説あるが、

『静岡県史』通史編2中世では、実質二万五千人程度とする。実際はそれより少ないかもしれない。

同上書 15頁

とするのである。『信長公記』では、

世は末世だというけれど、今も日月は巖然と天にあり、正邪を明らかにしている。今川義元は山口教継の在所へきて、鳴海に四万五千の大軍をなびかせたが、それも役に立たず、千分の一の信長勢、わずか二千そこそこの軍勢に打ちたたかれ、逃げるところを討たれて死ん

だ。因果は歴然、善悪二つの道理は明らかで、天道に背くと恐ろしいことになるものである。

太田牛一 同上書 103頁

と記されているので、これに従い、4万5千の大軍と2千の兵と流布されているのである。だが、何故が故に義元は西上したのか、また、「上洛」、「天下取り」ではなかったのか。

一つの仮定として次のようなことが考えられる。それは尾張の那古野城（名古屋市中区）およびその支配領域の奪還・回復であったのではないかということである。

有光 前掲書 279頁

との指摘があり、その奪還・回復の理由として、

尾張那古野（名兎耶）氏は、同国愛知郡古野庄を出自とする領主で、鎌倉末の頃今川始祖2代目基氏の妹が嫁ぎ、さらに婿も今川氏に養子に入ったことから今川氏の一家となったことから那古野今川氏と称され、今川氏の一家となったものと思われる。（中略）大永から享禄年間（1520年代）に後継者がいなかったのか駿河の今川氏親の末子、義元からいえば末弟の氏豊が養子に入ったとされる。（中略）氏豊の支配地は尾張国愛知郡から春日井郡南部にまで及んでいたと見られる。ところが、天文7年頃に信秀による那古野城攻略が行なわれ、氏豊が没落する。

同上書 280～282頁

と言われる様に、尾張における旧領回復の意味が大きいとされるのだが、

単なる国境争いに決着をつけるだけのものであったとするには、その準備や規模からいっても納得しがたい。桶狭間への道は、上洛に通ずる道ではあったかもしれないが、天下取りの道というわけではなかった、というのが今の段階で考えられるところである。

同上書 283頁

と。当時、義元は、甲斐の武田信玄、相模の北条氏康との間に「三国同盟」を結んでおり、尾張、美濃と前面の敵はいるとしても、将軍家を補佐するという名分で以て「上洛」する事において、後顧の憂いはなかったのである。

これに対して、

上洛をめざしたという説と尾張平定説、あるいはもっと限定して鳴海近辺からの織田勢の排除をめざしただけという説に大きく分かれる。これも推測の域を出ないが、いかに準備を整え大軍を率いてみずから出陣したとしても、尾張や美濃・近江を簡単に通過できるとは考えにくい。上洛までは考えておらず、信長の討滅と尾張平定を目標としていたのではないだろうか。

池上 前掲書 15頁

とも言われるのである。

那古野及びその周辺の地域が今川家ゆかりの地だったのだが、この時には、織田信秀のものとなっており、「村木砦の戦い」に際しても、信長は那古野城から出陣している。

いずれにしても、義元が軍勢を率いて西上した事は事実で、これが彼の命取りになってしまったのである。

勝敗を分けたのは、今川方が山間の道に隊列が延びていたのに対して、信長勢が側面から手薄な本体を攻撃したことによるとらえるのが妥当なところであろう。こうした作戦なり攻撃の方法は、彼我の軍勢に開きがある場合に当然考えられる戦法であり、それを予期していなかった今川方にはやはり油断があったと言わざるをえない。

有光 前掲書 289頁

二〇〇〇弱が今川軍との決戦に参加した人数と考えられる。

日本史史料研究会監修 渡辺大門編『信長軍の合戦史』1560-1582 吉川弘文館 2016 16頁

とされ、

「(前略)『少数の兵だからといって多数の敵を恐れるな。勝敗は時の運は天にある』と言う事を知らぬか。敵が掛ってきたら引け、敵が退いたら追うのだ。何としても敵を練り倒し、追い崩す。たやすいことだ敵の武器など分捕るな。捨てておけ。合戦に勝ちさえすれば、この場に参加した者は家の名誉、末代までの高名であるぞ。ひたすら励め」

太田 前掲書 101頁

空が晴れたのを見て、信長は槍をおっ取り、大音声を立てて「それ、掛れ、かかれ」と叫ぶ。黒煙を立てて打ち掛かるのを見て、敵は水を撒くように後ろへどっと崩れた。弓槍・鉄砲・幟・差し物、算を乱すとはこのことか。義元の朱塗りの輿さえ打ち捨てて、崩れ逃げた。(中略) 服部春安は義元に打ちかかり、膝口を切られて倒れ伏す。毛利良勝は、義元を切り伏せて首を取った。

同上書 101～2頁

『信長公記』の影響から、義元軍の45,000に対して信長軍の2,000の数が強調され、そのため、義元的首を取ったと言う事で、「奇襲」説が言われるのである。

だが、この戦いで義元の重臣で城主クラスが10人も討ち死にしていると言う事を重視して、信長軍も義元軍に匹敵する数を整えた正面からの「戦さ」だったとし、

今川本隊が織田信長の攻撃を受けて、完全に壊滅している、と言う事です。右の人々は、義元の旗本とか親衛軍に属していたわけではない。少なくとも数百人単位の兵を率いて、桶狭間に展開していた。だから「狙うは義元的首一つ、他の者には目もくれるな」式の戦いを信長が選択していたら、彼らが揃って討ち死にする事は考えがたい。(中略) 兵力がそれなりに拮抗していた。

本郷和人『戦いの日本史 武士の時代を読み直す』

角川選書 平成24年 178～9頁

と言うのである。そして同氏も「上洛」ではなかったと言っている。

既に家督を継いでいた氏真だったが、同7年、徳川家康と戦い敗れて三河を失い、更に、父信虎に勧められた武田信玄(晴信)が駿河に出兵したのを迎え撃つが、家臣の裏切りがあり府中も陥され、遠江掛川城に逃れる。

信玄の駿河侵入と時を同じくして徳川家康が遠江攻略に着手。同12年正月、掛川城を包囲し、5月には徳川、北条両家の和がなり、氏真は北条氏支配下の伊豆に移されるが、当主氏政と不和となり、一時、豊臣秀吉に仕えたが、家康の庇護を受ける。子孫は江戸幕府の高家として徳川家に仕えるのである。

II. ザビエルを受け継いだ人々

ザビエルに従い来航したトーレス Cosme de Torres (1510? - 70) は、彼の離日後の日本布教長として日本におけるキリスト教布教の礎を築いたと言う点でその功績は大きい。

トーレスは徹底した適応主義を取り、衣食住においても日本に馴染もうとし、そのために

人々から親しみを持たれ、それが布教に大いに役立ったと言われている。

一面においてはその素朴な謙虚さにより、また一面においては聖人たるザビエルと組織家たるヴァリニアーノの偉大な陰に隠れているために、まったく人に知られていない人物、コスメ・デ・トーレスこそ日本の布教の形を作り上げた人である。

結城了悟『長崎を開いた人 コスメ・デ・トーレス』
サンパウロ 2007 15頁

この様に、二人の事績が強調される余り、その間に挟まれて目立たない存在だったが、彼の地道な活動の故に、イエズス会を始めとするキリスト教が日本に根づくのだった。

バレンシア生まれのスペイン人トーレスは、同地で神学を学び1534年頃司祭となり、マジヨ(ヨ)ルカ島でのラテン語教師を経てメキシコでスペイン艦隊の嘱託司祭となる。1546年、モルッカ諸島で布教中のザビエルとアンボイナ(ン)で会い、感銘を受け共にゴアへ行き、48年にイエズス会に入会。ザビエルの日本渡航の際、23歳のイルマン(修道士)フェルナンデスJuan Fernandez de Oviedo(1526-67)、アンジロー等と同行。39歳だった。

鹿児島に到着した(1549・8・15)一行だが、領主島津貴久(永正11<1514>-元亀2<71>)の厚遇が一変した事でアンジローを残し、ザビエルに従い日本人信者ベルナルド、アンジローの弟ジョアン等と共に平戸へ渡り(天文19<50>・9)領主松浦隆信(享禄2<1529>-慶長4<99>)の庇護を受けるのである。1ヶ月余でザビエルが山口へ去ると後事を託されたトーレスはフェルナンデスと共に残り、1年程滞在する。

だが、トーレスも、天文20(51)年9月、ザビエルが豊後の府内に去るに際して山口へ移り、彼自身が府内に去る迄の間6年近くをここに滞在するのだった。

「京風文化」を取り入れ「西の都」と言われる山口の領主でキリシタンに理解を示した大内義隆(永正5<1507>-天文20<51>)が自刃に追いやられた「山口事件」で、一時的に避難するが、弘治2(56)年の末迄の約6年間をフェルナンデス、ザビエルから受洗しイルマンとなった盲目の琵琶法師ロレンソ了斎(大永6<1526>-文禄1<92>)等の協力を得て同地で活動するのである。この間、武士を含む約2千人の信者を得たとされる。

だが、結城氏の指摘の如く、6年にわたる活動にも関わらず、現在の山口においてトーレスはザビエルの陰に隠れた存在となっているのである。

ザビエルの離日(天文20<51>・11・20)により、イエズス会日本布教長(上長)として元亀1(70)年迄の19年間にわたり、キリシタン布教に貢献。弘治2(56)年には、ザビエルが礎を築いた豊後府内に移り、ここを拠点に活動を開始するのだった。

そこには、ザビエルを厚遇した大友義鎮(宗麟 享禄3<1530>-天正15<87>)がおり、

後の彼の入信に影響を与えるのだった。

ザビエルに次いで1550年代から60年代にかけては、彼に同行したトレス (Torres) が日本区長として布教の礎を固め、更にトレスの下に働いたヴィレラ (Vilela, Vilella) の活動が注目される。

大類伸『キリシタン運動の時代』—日本学士院所蔵
キリシタン資料について—アルファ 1985 17頁

と言われる様に日本におけるキリシタン発展史におけるトーレスの果たした役割は大きい。

こうした彼の協力者として、彼の命により上洛、將軍足利義輝の許可を得て京都でロレンソ了齋と共に布教を行ない、永禄5年 (1563) 以降、堺を布教の拠点として結城忠正 (生没年不詳) 父子、高山図書 (?—文禄4 <1595>), 右近 (?—元和1 <1615>) 親子等を信者にし、近畿地方に大きな足跡を残したヴィレラ Gaspar Vilela (1526 ?—72) 神父がいたのである。

1560年ガスパル・ヴィレラの一行が將軍足利義輝から都での布教許可を得る過程や1563年、三好長慶の居城飯盛城で畿内の大名が大量に改宗した事柄、また將軍の死後、堺に追放されていたフロイスが織田信長から布教許可を得る過程において、ロレンソは決定的に重要な役割をたしている。

小峯和明他『キリシタン文化と日欧交流』
勉誠出版 2009 98頁

と言われるロレンソ了齋の存在も大きい。

そして、ガーゴ Baltasar Gago 神父 (1515頃—83), イルマンのシルヴァ Duarte Sylva (1536—63), アルカセヴァ Pedre de Alcaceva (1523頃—85) がザビエルの手配で来日 (天文21 <52>) するのだが、中でも、アルメイダ Luis de Almeida (1525—83) との出会いはトーレスにとって心強いものとなった。

貴族と言われる裕福な家柄のアルメイダはリスボア (ン) で医学を学び外科医の免許を得るのだが貿易商としてインドへ渡る。共同経営者で、最初のヨーロッパ船として平戸に入港 (50), 翌年、豊後の日出でザビエルを迎え、随伴して大友義鎮に謁し、ザビエルの臨終にも立ち会ったガマ Duarte da Gama (?—1555) の船で種子島に上陸 (52)。平戸を経て山口でトーレスと邂逅。その後も貿易に従事していたが、元治元 (55) 年再来日し、翌年、府内でガーゴの指導によりイエズス会に入り助修士となる。トーレスも府内へ移る。

その際に四千ドゥカーットの資産を持参金として日本の修道会に提供

した。

松田毅一『南蛮のパテレン』朝文社 2001 78頁

と言われ、貧困に伴う嬰兒殺しに対応し孤児院を設立する等慈善活動に力を入れると共に、

豊後の病院の名はヨーロッパ医学を日本に伝えた人物イルマン・ルイス・アルメイダの名に結びついて残っている。

結城 前掲書 59頁

と言われる様に、元治3(57)年には、大友義鎮の庇護を受け府内に病院を建て、自らも外科医として南蛮医学を駆使して腫瘍や皮膚病の治療に当たるのだった。この病院は外科、内科の他にハンセン病の治療も行い、開設2年にして病棟、薬局、手術室、付属医学校を持つと言う総合病院の機能を持つに至るのである。

彼はヨーロッパ医学を示し、その管理を組織し、経費を探し、特に彼の精神と医学知識を病人への奉仕に捧げた人物である。

同上書 59頁

貧富の差を問わぬ治療と、内科における漢方薬の導入等斬新なものがあつたのだが、1558年イエズス会が医療を禁止したため、以後、かれはイエズス会の会計係として長崎、平戸、横瀬浦、福田等に入港するポルトガル船の取引に当たると共に病弱のトーレスの代理として九州各地の領主と交渉するのである。点在する教会を中心に九州各地を巡回しながら、五島の領主宇久純定(生没年不詳)の熱病の治療をする等医療活動も続けるのだった。

1565年にはトーレスの指示で5ヶ月間フロイス Luis Frois (1532? - 慶長2(97))と共に畿内に赴き、京都、奈良、堺等を訪問。天正8(80)年、マカオにおいて司祭に叙階され、巡察師ヴァリニアーノ Alessandro Valignano (1539-1606)によって任ぜられた天草地区院長の職を全うし河内浦に没する。58歳だった。

パアデレが主導権をもっており、戦国大名領内への入港と貿易の可能性はパアデレの手腕に依存することが多かったのである。

海老沢有道『日本キリシタン史』はなわ書房 2004 57頁

と言う背景から、トーレスは布教活動にポルトガル船の来航を積極的に利用するのである。

商人たちは、日本の国内事情に通じていなかったし、日本は戦国時代でひじょうに治安が乱れていたから、日本に住んでいるパテレンたちの指示を受ける必要があった。また、他方、パテレンたちにして

も、ヨーロッパやインドからの指令や通信、および海外から送られてくる物資は南蛮船によって届けられるのであるから、自然に南蛮船が入港するところに布教の根拠地を設けるようになった。言いかえるならば、南蛮船は、バテレンがいるところの港に来たのである。

松田 前掲書 78頁

と指摘される様に、両者は持ちつもたれつの関係でもあったのである。

永禄5（62）年、南蛮貿易港として開港した大村領の横瀬浦（長崎県）でトーレスはアルメイダと共に布教。翌6年6月に最初のキリシタン大名となる35歳の領主大村純忠（天文2〈1533〉—天正〈87〉）に53歳のトーレスが洗礼を授けるのだった。



写真8 横瀬浦



写真9 福田

だが、同年8月には純忠の行動を快く思わない家臣達が反発、武雄領主後藤貴明と呼応して11月に横瀬浦は壊滅させられるのだった。そのため、トーレス等は島原へ退去する。

純忠は新たに福田浦を開港（永禄8〈65〉）するが、元亀2（71）年、長崎を南蛮貿易港とするのである。

貿易で賑わった横瀬浦ですが、一五六三年（永禄六）に武雄領主後藤貴明の襲撃を受けて横瀬浦は焼き払われ、港としては役に立たなくなってしまいました。福田に港を移しますが良好とは言えず、やがて大村領長崎が南蛮人たちの目にとまります。こうして、一五七一年（元亀二）長崎港が南蛮貿易港として開港されたのです。

大村市教育委員会 〔編〕『大村の歴史』2003 73頁

そして、当初の反発はあったものの、

大村純忠の時代は、家臣すべてが信者であったと言われている。

野本政宏「大村市内 キリシタンに関する史跡と私見」

『大村史談』第64号 2003 81頁

と言われる様に、純忠を入信させる事で、その家臣達を改宗させられたと言う点で、上層部への働きかけの効果を認識するのである。

トーレスはアルメイダと共に有馬領の肥前国口之津（島原）へ行き（永禄7（64））、そこに住むのだが、体調不良を訴えるようになる。

だが、布教長としてアルメイダとフロイスを畿内へ派遣（1565）。彼らは京都、奈良、堺等を訪れ、その後の同地域の布教に貢献するのである。

そして、

口之津は三千人のキリシタンを有し、

結城 前掲書 271

と言われる様になるのである。

そして、

有馬義貞は一五七八年に洗礼を受けると、九年ぶりに南蛮のジャンク船は島原半島南端の口之津に入港した

松田 前掲書 80頁

と言われる口之津は、その後、重要な港として明治以降まで栄えるのである。

その後、志岐での協議会を経て長崎、福田、大村へと足を延ばす等日本布教に大きく貢献するのだったが、新任の日本布教長カブラル Francisco Cabral（1528-1609）の着任（元亀1（70））に伴い、その職を譲る。病いを押しして志岐の協議会（8月）に出席するのだが、大村純忠（ドン・バルトロメ）から土地を譲り受けて「長崎を開いた人」トーレスは元亀1（1570）年10月、同地で死ぬ。60歳だった。

そして、1580年、マカオで司祭に叙階されたアルメイダは巡察師ヴァリニアーノに任ぜられた天草地区院長の職を全うし、天正11（83）年、天草の河内裏で没する。58歳だった。

結

今川義元を討ち天下人への道を歩み始めた織田信長は、徳川家康と同盟して後顧の憂いを除き美濃に進出。永禄10（1567）年、齊藤竜興を滅ぼし、稲葉山城を岐阜城と改名し居城とする。翌11年、足利義昭を奉じ上洛。義昭を将軍職に就け、中央政界に打って出る。

だが、キリシタンとの接点は未だ見られず、畿内で活動したヴィレラのような者もいたが、

キリシタンの活動は、九州が主要な舞台だった。信長の天下人としての性格が強まると共に、その理解を得て、キリシタンもその活動を活発化するのである。

参考文献

- 秋山駿『信長と日本人』飛鳥新書 2004
有光友学『今川義元』吉川弘文館 2008
池上裕子『織田信長』吉川弘文館 2016
江宮隆之『大原雪斎と今川義元』PHP文庫2010
海老沢有道『日本キリシタン史』塙選書 2004
太田牛一著中川太吉訳『信長公記』KADOKAWA 2014
大類伸『キリシタン運動の時代』—日本学士院所蔵キリシタン資料について—アルファ1985
岡田章雄『キリシタン大名』教育社 1985
小和田哲男『桶狭間の戦い』学研M文庫 2000
小和田哲男『駿河 今川氏十代』戎光詳出版 2015
金子拓『織田信長〈天下人〉の実像』講談社現代新書 2014
神田千里『織田信長』ちくま新書 2014
幸田露伴『蒲生氏郷 武田信玄 今川義元』講談社文芸文庫 2016
小峯和明他『キリシタン文化と日欧交流』勉誠出版 2009

他

Research Notes

The Modernization of Japan:
The Connections with Europe and America
from the View Point of World History

MATSUBARA, Masamichi

In this essay, I try to research two persons. One of them is ODA Nobunaga, and, another one is Cosme TORRES.

In part I, I attend to study about the struggle between ODA Nobunaga and IMAGAWA Yoshimoto.

In part I, I look in about Nobunaga before to think about to rule over Japan.

In part II, I look in TORRES to propagate Christianity in Japan after Zabier leaving Japan as person in charge.